



心之集
影
下

特別
イ 4
3163
29(2)



貴
44
3163
29(2)

戀部

戀

未見戀

不逢戀

月前待戀

祈戀

踈戀

難忘戀

夏戀

初戀

見戀

來不逢戀

逢戀

別戀

隔戀

恨戀

秋戀

惡戀

被返書戀

思戀

會後戀

切戀

久戀

絕戀

冬戀

聞戀

憑戀

待戀

夢中戀

變戀

經年戀

春戀

歲暮戀



朝戀	寄月戀	寄七夕戀	寄雲戀
寄煙戀	寄露戀	寄雨戀	寄雪戀
寄山戀	寄田戀	寄河戀	寄瀧戀
寄海戀	寄湖戀	寄舟戀	寄海人戀
寄波戀	寄磯戀	寄花戀	寄埋木戀
寄松戀	寄葦戀	寄草戀	寄萩戀
寄薄戀	寄志草戀	寄鴛鴦戀	寄鶯戀
寄郭公戀	寄雁戀	寄鹿戀	寄淚戀
寄衣戀	寄糸戀	寄髮戀	寄鬢戀

寄玉戀 寄琴戀 寄弓戀
 かしらとせせぬ女ふかりはるゝとて致さふこゝろをとりひやりとるは
 せもせぬたゝるはひとれとせけまひ

雑部

日	月	海邊	船
瀧	田蓑島	松ヶ崎	名所山
吉野山	棕橋山	三笠山	龜山
笠取山	逢坂山	志賀山越	甲斐嶺

をよとてんれみけのりくちりそふ

山家

山家雲

山家鳥

松

名所松

故郷松

海邊松

磯松

河邊松

水邊松

社頭松

松風

松風似雨

松映水

竹

松竹あり

靄

柏社

二月初半稲荷まつり

加茂祭

夏神事

加茂臨時祭

神樂

神代中流小満

山寺より

書

画

名

夢

影

老人

閑居

述懐

春述懐

秋述懐

冬述懐

寄山述懐

離別

ねむり

火打の具

茶に

かり

はる

桜の影

扇

羈旅

哀傷

懷舊

祝

社頭祝

寄龜祝

寄靄祝

寄松祝

寄竹祝

寄若菜祝

寄梅祝

寄花祝

寄菊祝

寄岩祝

寄浦祝

寄濱祝

寄船祝

寄衣祝

寄琴祝

寄扇祝

旋頭歌

名所紅葉

物名

ひららー

かよふさくら

しほのやま

さくら

かきうや

くらさ

くれのおも

ふゆをかき

かきやうや

かきやうや

折句

かきやうや

かきやうやのよきをけりかき返一

かきやうやのよきをけりかき返一

かきやうやのよきをけりかき返一

あゝとんかのまはれをきこふてかき返一
あゝとんかのまはれをきこふてかき返一
あゝとんかのまはれをきこふてかき返一
あゝとんかのまはれをきこふてかき返一

貫之集類題下

戀部

戀

古今恋二

我恋の如くぬ山後ふゆねもほとふそりひーくひま

かゝる古

續後拾恋一

何ひひるんとかひふん成のちあてりける恋多れありのけあは

ま

あひまひの事しーんあひまひの事しーんあひまひの事しーん

人あはれふしはるるあはれいりちあゆんそまはけかかん

貫之集類十三



續後撰恋二拾遺よみ人考らば

ねまの乳の涙も君の涙とて思ふ法をりあんとりあん拾

あまふ

そらふ

よみ人考らば

なまの乳の涙も君の涙とて思ふ法をりあんとりあん拾

拾遺恋二

玉海このまをふもて七人のゆきあころ今れをりかゝり時のももを拾

後撰恋二古今恋二在原元方

たよりのふもあまのひれあやあらん人ふ海と歌をりけり

初戀

忍戀

おもしろこれの神のすゝめをきつゝはるほふらぬ恋もするふ

玉葉恋五

そのいゝ玉下向

あまふ

たのめぬ

人知るゝいそぬおひれとひまふたふ涙れぬゝありのけり

目の中も見えぬもたをぬれぬとあふたふ涙をさるけりあまふ

古今恋三

忍ぶまゝいそぬおひれとひまふたふ涙れぬゝありのけり

新千恋一

人知るゝいそぬおひれとひまふたふ涙れぬゝありのけりあまふ

古今恋二

人知るゝいそぬおひれとひまふたふ涙れぬゝありのけり

古寫本

あまのれおひれとひまふたふ涙れぬゝありのけり

古今恋一

あまのれおひれとひまふたふ涙れぬゝありのけり

同恋二

あまのれおひれとひまふたふ涙れぬゝありのけり

同恋一

世のあまのれおひれとひまふたふ涙れぬゝありのけり

聞戀

未見戀

見戀

古今恋一
山櫻如夢花散まり海のうらむさうはうりあやあうかきん
同恋四
わそのかき物に中をあつくふははくあうとれむさうあま

被返書戀

憑戀

不逢戀

白梅はちのうらむさうの漢子も桜もさうあて歸さるん
おののうらむさうあやあうとれむさうあうとれむさうあう
あまのれあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
うはふもあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
拾遺恋三 村本人磨
うはふもあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
さうあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
普賢之四十五

来不逢戀

あまのれあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
おののうらむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
風雅雜上
山の櫻もあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
後撰恋二
あまのれあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう

思戀

あまのれあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
あまのれあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
あまのれあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
あまのれあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう
あまのれあうとれむさうあうとれむさうあうとれむさうあう

あひあまのきりしむ討つたてのうらむをいふをいふをいふ

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

後撰恋二 拾遺恋一

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

後撰恋二

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

拾遺恋一

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

貫之四十六

待戀

月前待戀

拾遺恋二

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

拾遺恋二

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

古今恋四

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

後撰恋三

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

同上

あふもたう討つたれとてさうのこゝろをいふにいはれはつたれ

逢戀

會後戀

夢中戀

古今恋二 ウイ ンイ
夢中も夢それか 夢中も夢それか 夢中も夢それか

新千恋二 新十
新千恋二 新千恋二 新千恋二

續千恋四 新後拾
續千恋四 續千恋四 續千恋四

あつて別一人と夢にさへはふまへもかひのあつて

析戀

ゆふにすたかけるまふれまひふんぬのあつてをかひ

續古今恋四 ふれけれ 續古下同
ふんぬのあつてをかひを我とあつて

あつてかへするあつてあつてあつてあつてあつて

賈之四十七

別戀

よきふんをゆふあつてあつてあつてあつてあつて

後撰恋三
いつそ我人ふもそん曉れあつてあつてあつてあつて

後撰恋四 拾遺恋三
曉れあつてあつてあつてあつてあつてあつて

かろたをさかひあつてあつてあつてあつてあつて

後撰恋三 後下同 かな
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

同恋一
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

切戀

同雜四
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

後撰恋二

わひひるる秋宵に夢をたかひくもあつかき縁の夢もふかきえん

わたり後

五葉恋一

あひはひて我恋志あま命草もけすふ人やほりとあひん

七五下同

わたり

志はたふれれそあふあふささたかぬれあへたむる秋宵

變戀

あふささたかぬれあへたむる秋宵

古今恋四拾遺恋三

さゆふささたかぬれあへたむる秋宵

●人知重ぬれあへたむる秋宵

疎戀

あふささたかぬれあへたむる秋宵

隔戀

あふささたかぬれあへたむる秋宵

たむささたかぬれあへたむる秋宵

久戀

あふささたかぬれあへたむる秋宵

あふささたかぬれあへたむる秋宵

經年戀

あふささたかぬれあへたむる秋宵

あふささたかぬれあへたむる秋宵

あふささたかぬれあへたむる秋宵

あも木をとりつゝ見まて吹風ふ若う年月つゝとをぢふ

我々をたあふさうけり年月のあひひあふさうけりつゝ

拾遺雜恋

むしつゝと世城のつきはさる柳れ松の葉聲をかひなうけり

後撰恋三

。みれ流のなをみゝま命もて年月もさき由するゝあ

拾遺恋三

わすしれ時一まひまの田とあふすゝと人さあさ

同上

あもからなれめいひちまのなうゝや人と恨みさへ

同恋五

。たうれ秋者むのうたうゝあさうゝの世まの恨みさへ

貫之四十九

絶戀

はらを海よりほらぬもの流れ流のなを流るゝ徒ゝのけり

あふさうまゝのうたうゝあさうゝの世まの恨みさへ

春戀

あふさうまゝのうたうゝあさうゝの世まの恨みさへ

風雅恋一

よれあふさうまゝのうたうゝあさうゝの世まの恨みさへ

けりつゝれまゝのうたうゝあさうゝの世まの恨みさへ

古今恋二

。あふさうまゝのうたうゝあさうゝの世まの恨みさへ

夏戀

夏恋れ山や花もまゝ夏もたゆゝもあふさうまゝのうたうゝあさうゝの世まの恨みさへ

古今恋一

秋戀

古今夏
ほろろと人なほの心もあはれ秋もはなはたあはれまじりけり

うたふつとまじりあはれ波もたつてはくつとそよ風

古寫本

つとまじりあはれとそよ風をよみてあはれあはれと増える

同上

●ほろろとまじりあはれはなはたあはれあはれとそよ風

秋風も萩のつとまじりあはれあはれとそよ風

古今秋下

萩のつとまじりあはれあはれとそよ風

後撰秋中

萩のつとまじりあはれあはれとそよ風

冬戀

人なほ小萩もつとまじりあはれあはれとそよ風

玉葉恋四

人なほ小萩もつとまじりあはれあはれとそよ風

同集

萩風も小萩もつとまじりあはれあはれとそよ風

新續古恋四

萩萩のつとまじりあはれあはれとそよ風

たつとまじりあはれあはれとそよ風

古今恋二

世も小萩もつとまじりあはれあはれとそよ風

あはれあはれとそよ風

歳暮戀

世の中いよまきぬへんゆかぬれと 愛しくも意もふ年も暮れをさける

朝戀

拾遺恋二 面影の死ねく時も寂しくなりしわがしき寝を惜しむ

と朝の床家なせぬかあまのあつぬきあはれをさるけし
何のそれ物みのほふをたぐく意なきはてしなくん

寄月戀

新勅恋五 おぬ人月影もあはれはなうも思はれ夜もお寂し寂しとてむ

拾遺恋三 照月も影もあはれはなうも思はれ夜もお寂し寂しとてむ

寄七夕戀

大空を渡るかやうもて星のほしはつねにひらくもねん

たまにふあはれもあはれはなうも思はれ夜もお寂し寂しとてむと

年をたぐく意もたぐくも我もあはれはなうも思はれ夜もお寂し寂しとてむうらみ

さるけし物もあはれはなうも思はれ夜もお寂し寂しとてむ

拾遺雜秋

あひまきてむもあはれはなうも思はれ夜もお寂し寂しとてむ

玉葉恋一

あまのあはれはなうも思はれ夜もお寂し寂しとてむ

古今恋二 忠孝

風もあはれはなうも思はれ夜もお寂し寂しとてむ

新古今恋一

あまのあはれはなうも思はれ夜もお寂し寂しとてむ

寄雲戀

寄煙戀

續古恋三拾遺恋三海念知 玉葉のあつ 續古 玉葉拾
いづれとて 我恋を 舟人よ 振渡るれ 心乃けりて ありて ありて

後撰恋四

○風吹くも 心あけりけりて 心あけりて 心あけりて 心あけりて

後撰秋中 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

寄露戀

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

古今恋二

寄雨戀

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

拾遺恋五

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

玉葉雜

寄雪戀

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

玉葉のあつ

寄山戀

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

拾遺恋五 藤原有時

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

新恋恋一 躬恒

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

寄河戀

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ 玉葉のあつ

風雅恋三

林イ

續古恋二つむ 続古下同
雲身もあつた物とあつたひり 雲の渡れは乃 色ふさうけの

古今恋一
よれは河を渡れさうのゆへ水のまをそととあつたひり

● 渡れを名に袖よりゆへなつたひり抱あつたひり

● 恋のまをまはあつたん 渡河なる 雲もまをまをさうのゆへ

拾遺恋四

たつたひりあつたひりあつたひりあつたひりあつたひり

新古恋一

長閑れに下なるの雲渡れは乃とあつた人そとひり

ひりは神をまをまをさうのまをまをまをまをまをまを

寄瀧戀

寄海戀

たき川 渡もつたとあれや 赤神の渡り 船の 渡り 白雲

たき川 渡もつたとあれや 赤神の渡り 船の 渡り 白雲

後撰恋一

○ 汐みぬ海と雲とやせとくひりあつたひりあつたひり

日雜二

波ふたねおきつるの雲渡れは乃とあつたひり

寄海人戀

修勢の浦にたまふとあつたひりあつたひりあつたひり

寄波戀

およの浦をみればの雲渡れは乃とあつたひり

新古恋一

風ふあつたひりあつたひりあつたひりあつたひり

寄磯戀

寄花戀

新勅恋五

花を愛して花を愛するものもあらずふり何ぞか人恋はる方なりけり

何ぞなりと名をえる人れよの業は自らぬきれも我ハ咲こつさ

寄埋木戀

花もせぬらひらひゆせぬ人ぞかりらん花もあふれぬらん

奥山のうりも木に花をまゆはしるきぬそりてぬきぬきあり

寄松戀

名もなきも咲ぬ山の根木ハ我人恋もぬきけきとありん

後撰恋二

かな後

甲斐のつねのやのふ年ある君ゆゑも我をたけきとぬぬへん

賈之五十四

寄蘆戀

玉葉雜三

人志ある人

○波よすれはるふ年する松の葉は久しきことあり誰かん

古今恋二

深はるの難波の折れ免もたるはるはるはる人恋もあや

後撰雜

かなきききき

後下同

かきくもたちとまぢにけり免ふはるはるもあふれん

後一

あや

花の愛のさゆふはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

寄萩戀

秋の萩をを花はるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

寄薄戀

花すき海はるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

寄忘草戀

おきのひらひら花の心も忘るはるはるはるはるはるはるはる

古今墨一
○ 是は人の法ふ自由の世の法に非ざるものなり

寄鴛鴦戀

老つてもうらなも後み座ふ恋はせしむらふそありか

寄鶯戀

人知まば我もかたつて年かまの愛のまを成れどもはばなく

寄郭公戀

古今恋二
はつこ山橋をまきとこ財を思ふまをかたむかひぬ

寄雁戀

同恋五
初宿のたれをそりし世の津人のごとく秋うけは

寄鹿戀

んごもかたりのぬか心を鹿のまをまけはまはるかたぬ

秋夜の下葉をまきつてまをまけはつてはつてはつてはつて

寄涙戀

古今恋二
涙はかりては、おろく涙の涙はこけその涙まきりたり

古今恋二
志はまきりては、涙の涙はこけおろく涙まきりたり

同上
君とみ涙涙をまきりては、涙の涙はこけおろく涙まきりたり

續後撰恋一在原業平朝臣
涙はまきりては、志はまきりては、人の涙はまきりたり

あつてもうらなも後み座ふ恋はせしむらふそありか

老つてもうらなも後み座ふ恋はせしむらふそありか

人知まば我もかたつて年かまの愛のまを成れどもはばなく

寄衣戀

君のよりぬきてそけりか衣袖をかきしは妻にきりけり
かゝ衣まきりぬけたりよ涙こそ今も中へ物さかひあつけれ

拾遺恋四

寄糸戀

○うかりける糸切をすくき糸は今もくたへかひきまぢん

同恋一

此の歌は拾

寄髮戀

髪をかきけり髪はぬきぬき髪はぬきぬき髪はぬきぬき

新古恋三

寄鬘戀

かけてあひあ人もかたれとまきまき顔髪をまきぬむうのこま

續後撰恋二

まのりる續後

寄玉戀

あつれをたて成徳めてぬき玉のあつれ身をみる涙なりけり

寄琴戀

むく琴は福よふあひあつれをたてぬき玉のあつれ身をみる涙なりけり

寄弓戀

古今恋二

まゆのまゆて月日毎ふる白雲の弓はまゆのまゆを福ね

あはれをみり

かへりしをまぬ女もやまほの婦は涙よふかへせとりのやひはた

持まぬかたふるけひはねかへせまね

新拾遺四

君のたれん親こそけひと成てりあつれをたてぬき玉のあつれ身をみる涙なりけり

雑部

日

茶も本をかりて一箇まのつるは此の書にその程むかひ

月

久方此月影にれは難波渡りたうと成ぬるは

海邊

古今雑上
難波うらみ難波を垣かりを免れおほとそ我に成ぬへがれ

船

新拾雑上
○波れよ波古波のゆきはふをまのりしふ波ぬる木の葉と冬を

をよとぞんれ毎にのらまてしりまふ

待つ事いそゆもふそがらこの船よりききふ人のこらう

水瀧

後撰夏

○是川の山中ありけりこのよみ琴波流るにさへきりたへるまを

いふ所てお流るるまを流るるの流るるまよりぬれ流るるま

拾遺雜上

よあるまを流るるの系をよけりしぬれとれいおるまを玉

玉葉雜二僧正遍昭

水とれおるまを流るる流るる流るるの系にそまけり

系とまを流るる流るる流るる流るるの系にそまけり

おるまを流るる流るる流るる流るるの系にそまけり

たまのまを流るる流るる流るる流るるの系にそまけり

百多れ花のかけまを流るる流るるの系にそまけり

白を流るる流るる流るる流るるの系にそまけり

古寫本

ふりまを流るる流るる流るるの系にそまけり

拾遺雜上

りりま

○流るる流るる流るる流るるの系にそまけり

古今雜上 拾遺雜

西秋ゆけし拾遺

抄中をありる古

ぬいよりたを流るる流るる流るるの系にそまけり

田 菘 嶋

たまひうぬれそまを流るる流るるの系にそまけり

拾遺雜

いほまを流るる流るる流るるの系にそまけり

たつとありる拾

杉ふけりる

松ヶ崎

名所山

わらわははやくしるもの神垣のこゝろにたふらひのこゝろにせん

のり

しめしめいふおしすてふまのこゝろにたふらひのこゝろにせん

吉野山

みよのやまのこゝろにたふらひのこゝろにせん

掠橋山

あしはしをわたるこゝろにたふらひのこゝろにせん

三笠山

拾遺雜

三笠のこゝろにたふらひのこゝろにせん

龜山

かめがはのこゝろにたふらひのこゝろにせん

笠取山

かさとりやまのこゝろにたふらひのこゝろにせん

貫之五十九

逢坂山

あさかやまのこゝろにたふらひのこゝろにせん

志賀山越

拾遺雜上

しげやまをこゝろにたふらひのこゝろにせん

甲斐嶺

かいのねのこゝろにたふらひのこゝろにせん

山家

やまがのこゝろにたふらひのこゝろにせん

山家雲

やまがのこゝろにたふらひのこゝろにせん

なまのこゝろにたふらひのこゝろにせん

しめしめいふおしすてふまのこゝろにたふらひのこゝろにせん

山家鳥

松

みよしの村もはるきと百もあつてよき事かては渡りけり

えい

きかへぬ松の葉はをそ枯れと紅葉すてはなつたりける

まへ

年月れかたれも知て我宿れ事替の松のまじきそえれ

續後拾雜

ぬくく続後下同

名所松

いづのうらわをよけりかきぬの松や我世れをてせかてえ

拾遺雜上

いづのうらわをよけりかきぬの松や我世れをてせかてえ

同上

○若ふれとせりてりける松のまじき松のまじき松のまじき松

後撰春上藤原雅正

花のまじき松のまじき松のまじき松のまじき松のまじき松

の

貫之六十

故郷松

海邊松

何のいれ松のけり世とこの小波の中あそぶ人へある

我のまじき松のまじき松のまじき松のまじき松のまじき松

拾遺賀

いづのうらわをよけりかきぬの松や我世れをてせかてえ

いづのうらわをよけりかきぬの松や我世れをてせかてえ

拾遺雜上

河邊松

○大井のいれ松のまじき松のまじき松のまじき松のまじき松

拾遺賀

松の根ふいほる松の根ふいほる松の根ふいほる松の根ふいほる

拾遺賀

松の根ふいほる松の根ふいほる松の根ふいほる松の根ふいほる

いづのうらわ

いづのうらわ

社頭松

松風

松風似雨

石清水松影たゞかけたるてたぬく由ありし兼代母てに

風雅雜上 風三

杖風

松の多と悲う小春の物る山風の滝の糸をすけし引らん

拾遺雜上

ぬふ松と吹松風の吹ぬまて池にみだりて増さるけり

新古雜中

かけふとてたちかたきとりの夜湯ぬぬあふ松の影を

玉葉雜三

うさぎの風一

ぬふ松と吹松風の吹ぬまて池にみだりて増さるけり

松映水

竹

あふ小松の影を池に映さるる松の影を池に映さるる

竹ぞもたけの枝る宿の影を池に映さるる松の影を池に映さるる

松と竹と竹り

鶴

ふ世のゆる竹のむゆる宿の影を池に映さるる松の影を池に映さるる

松と竹と竹り竹の影を池に映さるる松の影を池に映さるる

松をみよ竹の影を池に映さるる松の影を池に映さるる

よ松と竹と竹り竹の影を池に映さるる松の影を池に映さるる

ふ世まては松と竹と竹り竹の影を池に映さるる松の影を池に映さるる

秋霜の松の影を池に映さるる松の影を池に映さるる

むまゝにまゝにうらたにひらけりてまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

櫛のたゞに世に居てまゝに居てまゝに居てまゝに居てまゝに居てまゝに居て

新千賀

ふとせ物と我とまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

古今雜上

○何とてこれとて何とてこれとて何とてこれとて何とてこれとて何とてこれとて

柏社

かけとれまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

二月初年 稲荷まゝにまゝにまゝに

むまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

賈之六十二

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

夏神事

加茂祭

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

神代卷の筆跡のあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを 哉い

あまのりりそふなる或は雲の山人いませかへる處の如き

神代巻の筆跡のあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを

いふまゝの神代巻のあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを

あまのりりそふなる或は雲の山人いませかへる處の如き

いふまゝの神代巻のあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを

山寺よりする歌

書

山寺のいふまゝのあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを

後撰雜四

いふまゝの神代巻のあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを

古今雜上

いふまゝの神代巻のあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを

いふまゝの神代巻のあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを

いふまゝの神代巻のあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを

いふまゝの神代巻のあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを

老人

いふまゝの神代巻のあれなげくふ命にぞと教神代はさみうを

閑居

清くもて年ぬる人の自落のよふ白くそるるのけり

はるごとく年ぬる宿のうはまれば夜も日もあつくぬくけり

ひそむくまけはばをぬきき人めを宿の夢まあき

今宿の暮の想もや世の舟と隔る人くや秋のなりま

● 上ふおとんぬらもを時ぬるれぬけりこころれはゆあは

● 春をばまけけあわはるる宿のうらみかろく涙をうけ

ををたやゆき物あぬるおれをばほひよひぬかぬぬん

母頁之六十五

速懷

拾遺雜下

ま去秋よかひひれて日たつ時ふはあつとくの家ん

また秋のよはあつとくゆはなもおもひおちてなり

梅あり郊の夜もまき雪のこころはくはくまも

雪のふくまは鏡ふ雪を降よる老の志くはあや

● 善あひかへ梅あつとくは海のうまあけの秋本と世と

● いかへてのあせいのいぬこころうま世そむん方と

○ 世れ中らうたのあせか人のゆあせかふのあせと

後撰雜二

春述懷

物見たるは風のまはりのうらみとて

若菜のむすねはよのふゆのむすねを候りの色

常れをよのむすねのむすねのむすねのむすね

りてはよのむすねのむすねのむすねのむすね

かきとてぬむすねのむすねのむすねのむすね

後撰春下

八重むすねのむすねのむすねのむすね

●かきとてぬむすねのむすねのむすねのむすね

秋述懷

かきとてぬむすねのむすねのむすねのむすね

後撰春下

八重むすねのむすねのむすねのむすね

後撰秋風雅恋

萩のまはりのむすねのむすねのむすね

あつらふ風

りてはよのむすねのむすねのむすねのむすね

冬述懷

かきとてぬむすねのむすねのむすねのむすね

後撰冬

姉のむすねのむすねのむすねのむすね

同上

かきとてぬむすねのむすねのむすねのむすね

風雅旅

久しうこれに免ゆるふかきあはれ物とて人れはちとほく

すこもそあへて人れはちとほく

續古別

をいそつ別あはれ人れはちとほく

かゝ夜するらふあはれ人れはちとほく

あはれ人れはちとほく

あはれ人れはちとほく

あはれ人れはちとほく

あはれ人れはちとほく

古今別

あはれ人れはちとほく

同上

あはれ人れはちとほく

かん後い

あはれ人れはちとほく

玉葉旅とかり玉

あはれ人れはちとほく

拾遺旅

あはれ人れはちとほく

あはれ人れはちとほく

玉葉旅

別ゆく人成てしむと今宵より夢に逢はれぬと申すも

いと白くふらふねいそきかたなる旅をなすて思ふゆくの

古今別

むすみては来たにぬまの井にたつても人小別ぬれう

同上

白きれはまふめはるもあておのそん人小をなす

拾遺別

きくゆく人たれぬぬれ神の源にむとまうとくはく

新千載別

つづくと忘るわくとあふむあはれは我をさわはるが

丁を 新千同

いとほしきえぬる思ふいそきかたぬれぬと申すも

人をみあきをたゆけと夢枕にぬれぬと申すも

おのれ人ごとくあてまうと別る思ふ公ゆくとつひの

かたより別れぬと申すも思ふは出と人小あはれぬ

古今旅拾遺別

糸いよちあてまうと別れぬと申すも思ふはあはれ

玉ほとけいそきの神も我とく我おのれと我たれと

初あふゆいん時玉ほとけとあつての神をいひ思ふ

續千旅

初あふゆいん時玉ほとけとあつての神をいひ思ふ

續後拾別

黒うゆい下と燈を月とつとまを持ふそまひひくまへし

りてさにもあぬ列イに玉ほこのなれあまへイまて人のゆうあらん

風雅旅

幸くゆいそ致おつとおひあふふもくそに旅ひをせん

拾遺別

月影のちるひるもほりれのふれ物りふを居すまを

古今雜下拾遺志

誤三ノ二

おのひや致旅れ去く心知く旅も一木もまふ旅ぬおまを

あゆまのゆく柳同上てまを致あふとそくでかゝる人のさ

古今別

○旅の花をふあふぬせくそをまはまてそくそくそく

賈之十

後撰別

○くはまてそくそくそくそくそくそくそくそくそくそく

ぬきほりうら

れいぬきほりぬきほりぬきほりぬきほりぬきほりぬきほり

古寫本

井ふんそくそくそくそくそくそくそくそくそくそく

火おの具よたきあ致くまへ

あひくふおてく火の燈あふかきほり致あへそあひ

くまへり

あひく致あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

かっ

おるらん面影下ふむらうらるる花かこもふおのりよ

はうそく

拾遺別

ゆきこゝろぬひかたのうらなはかひひさかふまにわりのけ

●その人たふれ海あかちあわすくさふくねまゝのけ

新古別

玉ほころもまれば風きくふかこころいふまゝあふをたぬ

梅の箱篋たふそふそ

別てゆあふより遠くむらけのきくふかこころいふまゝあふをたぬ

船やれとてくそくそ

貫之七十一

羈 旅

いほけいもあせぬ風いさるる免我らふまわらさくけ

いはとてゆあふより遠くむらけのきくふかこころいふまゝあふをたぬ

古今雜上拾遺恋 誤ニテコニ入

おほくの波あふれ深のうは書のなふくそ君城ちわらひつれ

●とあふそふまのあふくく人れやのてる人々旅なうけふ

風雅恋四

いふそ風下同

かこつる所我あやほてよま枕膝々あひのそまひのうけ

古今春下

○やそりてまのひまふけのあひまふけのあひまふけのあひまふけ

ちく麻の書そくあふりあふれゆ旅人ふてあふかまふせ

多枝枯の草枕より君よりたよきこの春あそびをまはるけふ

新古旅

より新古

あつた夕風さむく成ぬる夜ははるはる宿をかくま

拾遺雜

むらり春のわひひまは物とまはるるも旅かゝる旅も春の宿ん

新古旅

なまはる旅より

まを新古

白雲の柳の影をみればわが心はわが心はわが心はわが心は

家路よりいづれにゆくとたひとを日びとをまはるを有ふたり

新千旅

わが心の海のちあつた神も向するぬきの道風をまはるらん

續後拾哀

ゆきよくふと旅あつた物とたひとを世の中いまにさうける

哀 傷

拾遺哀

多小結水にやまるとる厚敷のちあつた旅は世よりそあはせ

古今哀 拾遺同

より拾

着とくをりあつたけは世の中旅はあつたわが心は

同上

秋のちあつた古今同

かあつた

あつた知れぬのちあつたもあつたわが心は

古今哀

あつたあつたわが心は山田かりを旅よりまはる世の中旅はあつたわが心は

同上

あつたあつたわが心はわが心はわが心はわが心は

あつたあつたわが心はわが心はわが心はわが心は

あつたあつたわが心はわが心はわが心はわが心は

續古今哀

うけしものあふたれゆきとあはれぬるはこころあかりけし

まはるをたひひる人れあふたれけしゆきとあはれぬるはこ

新後拾雜

たしあかりこのあふたれゆきとあはれぬるはこ

新拾哀

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

貫之七十三

懐 舊

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

古今哀

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

續古今哀

あはれぬるはここのあふたれゆきとあはれぬるはこ

古今哀

時をくわたりて後子誓はるる別れと死ををける

わが哀れいともまゝ君のあひつゝおあゝをきりける

後撰哀拾遺同

哀あるまふ年の暮あひたれ別れやいとくさるる死

後撰哀

○君はさる年へ届ぬまゝ古くも君をぬめの涙なりけり

同上

○種をくゝ二葉の松のわりのあゝ君のふと世のたれをわきま

同上賀

○琴の音も昔も昔も世のたれする人れあひあはすべし

まき葉の海にわたるも世のたれをわきまのきりける

實之七十四

祝

松のみふ葉もふと世のたれあはすまきく今世のたれをわきま

常盤の葉も常盤の葉も人の齡も松と竹とかりけり

まきくふぬい

わがあひたれ松と竹とふとちひたれあはすまきく

後撰賀詠人不知

百もせといふもあはれあひたれあはすまきく

まきく

あはれのも祝ひるもあはれ世のたれあはすまきく

●とく世のまきくひつゝあはれ今もあはれにあはれ

あはれあはれとけり世のたれあはすまきく松のたれあはす

後撰賀
○しんがふとくつりてぬへーまふあれ年の上あこふまは来にけり

城名の沈みはすむ落あれらふと世の夏の救い部らん

まともそ人のさうけりるるるえりす多きき輝の世の花 義

拾遺賀

誰やこの救ふらん人れりえりふもたふける深の言部と

續古神祇

松をたのむはるの昔むらる深水り来まきくはりのまらえん

浪名よりいりくるる飛とあ代り我がりかとのまらへりけり

舟浦よりいりかたなるありの此よりも我若く波ゆとせあん

買文七十五

社頭祝

寄亀祝

寄鶴祝

河風の舞ふあむくたつらあつ世我波くたゆ若ふよすらん

さつら波すはるまふすむりつる若る角ん世の志人あまん

かのえゆるたのむも若る若ふよをたのめ齡を満らんへまれ

むれてかるはたれらるも若る若ん我若りかへり張あひへるなり

後撰賀

大系やま流の山はふ松をさけや木たつかきる世の秋えん

かつらほもえゆる松うまうへりそくへりまられりあかりけり

糸うまうへりあまのまの松へみる松紙をまのたれりそを見系

寄松祝

寄竹祝

新古賀
年々くしふおひそふ竹の世々を庵てかたぬきと推さふん

寄若菜祝

同上
若菜おつる世々くしふ世をさるる若菜代をあてはまんとせよ

ふ世くおひそふ若菜たよりふふはてはまんとおひそ若菜をまつむ

寄梅祝

古今賀
まきこしは宿おほり咲梅の世々くしふ世代をさるる

久志くも白りんくや梅れむまきさるるも咲を免にまん

寄花祝

後撰春上
まきこしは宿おほり咲梅の世々くしふ世代をさるる

心あて梅つる宿の花をまきはまきさるるも咲を免にまん

貫之七十六

寄菊祝

年々くしふ花白くもかそへつる若くも代をさるる世を免にまん

寄岩祝

岩おろくくおろ若海のくしふ世若くも代をさるる世を免にまん

松風おろけくおろ若と白波のよふる若海をさるる

寄浦祝

吹風おろけくおろ浦波の若くも代をさるる世を免にまん

寄濱祝

新古賀
若くも代の年の若をさるる白妙れ濱の若くも代をさるる世を免にまん

寄船祝

世々くしふおろくも若くも代をさるる世を免にまん

古今墨けー
ふれれれを ○まの時と暮つてまはなつたれおひけふのこころはな

古今物名拾遺同
よせかを ○豆栗のこころふまはら白せれらふせまゝを新時あは

古今物名拾遺雜
わさやうを ○うまおれ我まうもかろく人境のうけふあまの白を

あまを ○かたつらうあやれもかぬまをふたつとあまのあひへ

折句

古今物名拾遺雜折句
まゝあへー ○まゝあへーまゝあへーまゝあへーあまれあまむ秋をまゝあへ

あまを ○まゝあへーまゝあへーまゝあへー

ふれれれを ○まの時と暮つてまはなつたれおひけふのこころはな

あまを ○かたつらうあやれもかぬまをふたつとあまのあひへ

まゝあへー ○まゝあへーまゝあへーまゝあへーあまれあまむ秋をまゝあへ

あまを ○まの時と暮つてまはなつたれおひけふのこころはな

あまを ○まの時と暮つてまはなつたれおひけふのこころはな

あまを ○まの時と暮つてまはなつたれおひけふのこころはな

拾遺雜秋
世の中れ人ふを紙を免うくままにまをいへーとをたれあ

海野遊翁大人社中

鈴木兼三郎穂積信成輯

清水榮太郎藤原謙光

助成

薄井保之助平繁仲



實之七九

弘化二年乙巳夏刻成

鈴木縫殿助穂積信庸藏板

此發行書林

江戸下谷御成道

英屋文藏

